

jdzb echo

回顧

小塩 節 (Prof. Dr.)

半世紀近く前、ベルリンの壁が築かれてしばらくの後、ゲルマニスティックのフンボルト留学生だった私は初めてベルリンに旅をした。戦火に焼けたティーアガルテンの再び育ち始めた森の中を通り、たまたま旧日本大使館の前を通った。その建物はひと気がなく、不気味に黒々と夜空に聳え立っていて、妖怪でも出てきそうな、ゴシック・ロマンのような気配だった。少し離れた旧イタリア大使館には、最上階の破れ窓に一つだけ小さな灯がともっていて、これまたさ

らに不気味だった。

廃墟と化したこの旧日本大使館の建物を修復再生し、ここにベルリン日独センターを設立することが、日本の中曽根首相と連邦共和国のコール首相の語らいと合意によってきまり、1985年に組織が設立して23年を経た。創立当初から今まで私はベルリン日独センターの歩みを評議員として見守りともにしてきたが、今秋、高齢の故をもって辞するに当たり、求められて短い回顧を申し述べよう。

聖書の創世紀とヨハネ福音書

を真似して言えば、ベルリン日独センターについての私の思いの中には何よりも先ず「はじめに建物ありき」ということばが浮かぶ。それほどにこの建物は大きく堂々としていた。内部は使い切れぬほど広い。日本とドイツの友好関係はこの修復され活用されることとなった建物が象徴的に証した。そしてさらに、両国の友好だけでなく、それを基盤としながら、東と西の出会いの場、東側への語りかけの場としての働きが、意義深く始まり、移転後も本質に変わりはない。



ベルリン日独センター『一般公開の日』において桜アンサンブルはゲストミュージシャンも交え、独自にアレンジした日本の伝統音楽をピッコロ、フルート、太鼓、ピアノ、歌で紹介した。2008年は、ベルリン日独センターがダーレム地区に拠点を移して十周年目に当たり、『一般公開の日』では本節目も祝った(本紙6頁および8頁参照)。

目次

回顧	
小塩 節	1~2
編集後記	
佐藤宏美	2
インタビュー	
日本のマンガとアニメ	3
会議報告	
地球温暖化・エネルギー問題	4
交流事業	
ヤングリーダーズフォーラム	5
事業報告	6
2008年事業計画	7
ダーレム移転十周年	8

世界情勢とともにベルリン日独センターの活動はしかし少しずつ変わった。例えば当初は図書館の予定はなかった。しかし諸資料や図書が集まって、自然に図書館機能が必要となった。また当初は日本語教育は行わないと明言されていたが、1980年代のドイツにおける日本への関心の高まりに伴って、日本語講座も開かれるようになった。東京に本部のある国際交流基金は当初は関係が薄かったが、現在は人材と財政の両面で協力している。

日本人とドイツ人がここでは共同で働いている。言語も仕事の仕方もメンタリティも全く異なる人びとが、対等に協力し合って働くにはさまざまな困難があったはずだ。日本人は大部屋で働くのがふつうであり、ドイツ人は原則として個室で執務する。孤独なタコ壺(穴)から出てきて、言葉によるコミュニケーションをはかるとき、一般的に言ってふつうの日本人は議論が苦手である。いいことを発言しても、その意見を論理的に構築して論旨を貫徹させ、最後のよい結実を勝ちとることが苦手である。むろん例外的な日本人も少数はあるかもしれぬが、一般にはそうだ。一方ドイツ人は、いったん言い出したら断固あるいは頑固に自説を貫き、自己主張を遣り通す。極めてヨーロッパ的である。

こういった両民族の人々をたばね、ひとつの恒久的運動組織にまとめあげるのは、至難の業であったろう。初代の事務総長グラーフ・ブロックドルフは異才を発揮

してよく当センターの働きをリードしていった。その後の代々の事務総長、副事務総長、そして全所員に対し、そのよき働きについて私は心から感謝の意を表したい。かつてベルリンには第一次大戦後1933年まで、ノーベル化学賞受賞者Fritz HaberとAlbert Einsteinが設立に寄与し、日本の薬学者・星一(はじめ)の私的出費によって運営された日本研究所があつてよい働きをしたが、その規模や働きはセンターとは比較にならぬほど小さかった。

これからのベルリン日独センターは日独の友好のみではなく、EU全体とアジア、アメリカをも巻き込んだ活動を、仮に困難があろうともそれを乗り越え、力を合わせてなしとげていこう。理事会、所員、関係者ご一同のよきお働きと成功とを、心から祈る次第である。



小塩節氏はフェリス女学院理事長、中央大学名誉教授。1985年よりベルリン日独センター評議会委員を、1989年より同評議会副議長を務めてきた。

『jdzbecho』読者の皆様

巻頭文をお寄せくださった小塩節氏は、組織設立以降長きにわたり、ベルリン日独センター評議員として、とりわけ過去19年間は同評議会の副議長として、センターの発展に大きく貢献くださいました。このたびは、小塩氏と相前後して、沢田敏男氏、外林秀人氏、そして豊田耕児氏も評議員を退任されます。設立時より常にセンターの発展をあたたく見守り、時には厳しくご指導くださいました四名の方々に、この紙面を借りて、心からの感謝の意を表させていただきます。

この間1998年には、ボンからベルリンへの首都移転にともない、ベルリン日独センターは現在の日本大使館の建物からダーレム地区に、活動の場を移しました。移転から満10年を記念して、最終ページに施設と所員の紹介を掲載しました。1985年の設立から23年を経て、センターの活動は確かに、時代とともに変化しています。しかし、「東西の出会いと対話の場」としての基本的な使命は変わりません。

気候保全の観点からエネルギー問題をとりえた東京・経団連会館でのシンポジウムは、国際的な課題に日独がともに取り組んだもの、両国の次世代リーダー層を招き合宿形式で催した「日独ヤングリーダーズ・フォーラム」は、将来に向けて日独間の交流の絆を深めるためのものです。いずれの事業報告からも、出会いと対話の機会が、両国関係者間の交流さらには協働の持続的な発展に着実に繋がる手応えを、十二分に感じることが出来ます。また、インタビュー記事でご紹介した日本アニメに関するシンポジウムは、交流による相互刺激を通じて文化が一層豊かに発展する過程に迫るものです。

佐藤宏美

ベルリン日独センター 副事務総長

jdzbecho

ベルリン日独センター広報紙『jdzbecho』は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行: ベルリン日独センター (JDZB)
編集: ミヒヤエル・ニーマン
E-Mail: mniemann@jdzbe.de

本紙『jdzbecho』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先:

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel.: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzbe@jdzbe.de URL: <http://www.jdzbe.de>

ベルリン日独センター図書室の開室時間は火曜日～木曜日午前10時～午後4時です。

友の会連絡先: freundeskreis@jdzbe.de

日本のアニメはドイツの一般大衆にも普及し、ファン層を超えて広く注目を集めている。ベルリン日独センターは本年10月30日と31日に、文化学的およびメディア学的観点から日本のアニメを取り上げるシンポジウムを開催する。

本会議の基調報告者の一人で、世界最大の日本映画フェスティバル「ニッポン・コネクション」のフェスティバル・ディレクターの一人である映画批評家のアレクサンダー・ツァールテン氏(Dr.、マインツ大学)にインタビューした。

編集部:ここ数年間、世界中で日本文化の人氣が高まっていますが、その理由は何処にありますか。

ツァールテン:人氣が高まっているのは日本文化全般ではなく、日本のポップカルチャーの一部で、とりわけマンガおよびアニメです。その理由を説明するのは簡単ではありません。一方には、日本のイメージと、それにとまなう異国情緒的な要素があり、他方には、現代日本のなかに西洋およびアジアならびに近代化の様々な要素が混在する「純粋に日本的」でない現象があります。すなわち、美意識の面においても、ストーリー・テリングの面においても、遠くて近い関係にあるのがマンガとアニメで、これが人氣の理由でしょう。

編集部:アニメやマンガを受容する層も様々ですが、それぞれの層は何処に魅力を感じているのでしょうか。また、その魅力は「日本の特質」によってどの程度強化されるのでしょうか。アニメとマンガがグローバル化およびバーチャル化の時代に向かう時、「典型的な日本的要素」が貢献するのでしょうか。

ツァールテン:答えは、何を「典型的に日本的」と捉えるかによって異なります。伝統的な要素と、異文化の影響を含む現代的な要素のミックスが重要で、これをドラマチックで、作劇法に則った特定の形態に移すことも必要です。アニメの多くには、画面の二次元性や、既知感を創出するのに役立つ数秒間の静止画など、特定の美意識が認められます。しかしながら、そうした特質は1950年代に数多く制作されたアメリカのテレビアニメにも認められるもので、日本アニメの専売特許と名づけるには少々無理があります。

もうひとつ重要な点は、全てが関連していることです。マンガがあり、テレビアニメがあり、カードゲームやコスプレに適したキャラクターがあり、最後にテレビゲーム、ビデオゲーム、コンピュータゲームがあります。端的に言うと、ここにも既知感をベースとするマーケティングが可能な世界があり、消費者は、そのなかに没頭できるのです。

この圧縮されたグローバル性を美しく包み込み、マーケティングするプロフェッショナルリティを、「現代日本の特徴」と名づけることが可能です。しかしながら、これは、「日本の根源的メンタリティー」とは無関係で、日本は他の諸国

と比べると、自国文化のマーケティングを通じて、グローバル化のプロセスおよびそのさまざまな側面を明らかにし、それに作用を及ぼすことに秀でているのです。

編集部:2008年に、アジアでも人氣の「ドラえもん」が日本のアニメ文化大使に任命されましたが、これは、外国の対日イメージアップに貢献しますか。

ツァールテン:アニメの美意識を取り上げるとは、日本国政府のきわめて実際的な判断でした。政府は、西洋世界で「ジャパン・バッシング」が広まっていた1980年代とは異なり、アニメのキャラクターが日本のポジティブなイメージを伝えることに気づいたのです。

編集部:日本国内では、日本のポップカルチャーが世界的に受容される現象をどのように認識し、反応していますか。

ツァールテン:公的な政治経済のレベルと、国民レベルを分けて考える必要があります。前者は、外国の現象が自国に及ぼす影響をきわめて即物的に観察しています。後者は、驚きと誇らしさが混ざった気持ちで受け止めているようです。ここ数年で、この現象の原因解明を試みる研究が多数発表されたのは興味深いことです。たとえば、特定の感情を喚起する江戸時代の伝統に根拠を求める研究もあります。しかしながら、一部国粋主義的なトーンが加わることもあるため、時には注意も必要です。

編集部:江戸時代の風刺画から発祥し、スタジオジブリ、3Dのコンピュータゲームおよびビデオゲームまでつづくアニメの歴史を手短かに説明してください。

ツァールテン:江戸時代まで遡る必要はありません。アニメの二元性は、絵解きに始まる紙芝居の系譜に見ることが可能です。昭和初期に誕生した街頭紙芝居は戦後に最盛期を迎え、街頭テレビの開始とともに衰退しましたが、この時期、面白いことに紙芝居製作者の多くがマンガ・アニメ産業に転職しました。

「アニメ」とは厳密には、1960年以降の「アニメーション映画」を指します。国際的に最も有名なのが宮崎駿とスタジオジブリで、これが、アニメーション映画のプロトタイプです。宮崎自身



は、自分をリミテッドアニメの伝統に立つものではなく、より手の込んだフルアニメの先駆者と捉えています。

編集部:現在のマンガとアニメのブームは、ピークに達したといえるでしょうか。今後の展望を聞かせてください。

ツァールテン:日本に対する全般的な関心、そして、日本のポップカルチャーに対する特別な関心は、直線的に発展してきたものではありません。色々な起伏があつてここまで到達したもので、今後もそうした波が起こりつづけるでしょう。

現在、日本のマンガ産業は、市場縮小にともなう問題を抱えており、国際市場を目指して大規模に変わりつつあります。従来は日本の国内市場に焦点が当てられていましたが、今後はアジア、ヨーロッパ、米国など国際市場での受容を目指すようになるでしょう。その結果として日本のマンガおよびアニメがどのように変化するか、興味深いところです。

ドイツは、日本のマンガを輸入しているだけではありません。マンガの美意識に基づいて独自のストーリーを語る多数の若手ドイツ人マンガ家が活躍しています。これらアーティストに対峙するのが、日本のハイプロフェッショナルなマンガ産業です。ここに、きわめて興味深い交流形態がみられます。

将来、日本をはじめとするアジア諸国のポップカルチャーが、ますます大きな役割を担うことになると思います。ここで言う「日本」は、単なる地理的名称です。というのも、「日本のポップカルチャー」とは、「日本文化の純粋形態」ではないからです。「日本のポップカルチャー」は日本から輸出され、日本に再輸入される「グローバル化された文化が混在する文化」です。将来を掌握するのは、「純粋なアイデンティティ」に固執する人ではなく、質の高い文化ミックスを創造し、マーケティングする能力のある人です。この両極の何処に日本がみずからを位置づけるかを観察するのも、面白いところです。

日独会議『地球温暖化抑制およびエネルギー問題に関するグローバルな取り組み——日独協力の展望』2008年6月30日、東京開催
フリーデマン・ミュラー (Dr.)
ドイツ国際政治・安全保障研究所 (S W P)

エネルギーの安定供給および気候保全に係わるグローバルな取り組みにおいて日本とドイツの協力可能性を検討する会議が2008年6月、フリードリヒ・エーバルト財団、富士通総研、ベルリン日独センターの共催で開催された。

参加申し込みは多数にのぼったが、経団連会館の会場席数の制約から、開催日の10日ほど前には受付を締切らざるを得なかった。このことから、日本における本課題への関心の高さを窺うことができる。会議当日、会場は代議士、政府関係者、学者、研究者、経済産業界の代表で埋まった。翌週に主要国 (G 8) 首脳会議が控えていたにもかかわらず、在日ドイツ大使館からも大使および公使が出席した。

会議テーマに関して、日独間で協議すべき材料には事欠かない。

- ・ 国内総生産 (G D P) の規模において、日本は世界第 2 位、ドイツは第 3 位の経済大国である。
- ・ 日独ともに、特記すべき石油および天然ガス備蓄を有さない。
- ・ 国民一人当たりの温室効果ガス排出量は、日独ほぼ同じである。
- ・ 京都議定書、その準備を行った気候変動枠組条約 (U N F C C C) 第 1 回締約国会議 (1995年 3 月、ベルリン開催)、さらに U N F C C C 事務局のボン立地など、日独ともに、地球温暖化防止に向けた多国間枠組み構築において、重要な役割を果たしてきた。
- ・ 日独ともに、国際関係における自国の適切な役割を模索中である。

日本では、礼儀正しく控え目な態度が求められるが、それが、率直な討議の阻害要因とみられることも多い。本会議も礼儀正しく謙遜に進められたが、その中でも胸襟を開いた討議がみられたことは特筆に値する。核エネルギーや温室効果ガス削減の基準年について活発に討議され、日本のトップランナー方式、欧州排出権取引制度 (E U - E T S)、ドイツの再生可能エネルギー法 (E E G) に対する賛辞が述べられるなかで、見解の相違が両国間ばかりでなく、両国の国内にも存在することが明らかになった。たとえば、福山哲郎 (参議院議員、民主党政調会長代理) が、「日本政府の政策は原子力発電に依存しているが、その計画どおりに 10 基を新設できるのか疑問である」と発言したことは新鮮に映った。

他の会議とは異なり本会議席上における政治家の基調講演は、政党あるいは政府の見解

に終始することがなかった。政治活動が一筋縄でいかないことも示した。フリデリケ・ボッセ (Dr., ベルリン日独センター事務総長) およびベルトルト・ラインバッハ (フリードリヒ・エーバルト財団) の開会挨拶の後に基調講演に立った福山哲郎 (既出) は、国際協議に基づく地球温暖化抑制計画に賛同する発言を行なった。福山によると、日本が化石燃料の割合を抑えた低炭素エネルギー供給を実現する可能性は高いが、その導入プロセスに着手し、実現を目指すのであれば、アジアで競争する中国およびインドも本プロセスに取り入れる必要がある。有馬純 (経済産業省大臣官房参事官、国際エネルギー交渉担当、資源エネルギー長官官房国際課長) は、トップランナー方式等の現行プログラムを例に、国際比較における日本の立場を説明し、「C O 2 を 2005 年比で 2020 年までに 14%、2050 年までに 60%~80% 削減し、世界全体の排出量を今後 10 年から 20 年の間にピークアウトさせる」という福田ビジョン (福田総理スピーチ、2008 年 6 月) の実行可能性を取り上げた。ペトラ・ピアヴィルト (環境・自然保護・原子炉安全委員会会長) は、ドイツが採択したエネルギー気候統合政策 (I E P K) を紹介し、同政策はエネルギー効率向上の促進、再生可能エネルギー法、競売排出権から得られる資金の利用方法等とも係わるため複雑であり、そのために妥協が必要であると説明した。フランク・シュヴァーベ (ドイツ連邦議会議員、社会民主党議員団機構問題・排出権取引問題担当議員) は、欧州排出権取引制度のフェーズ I (2005 年~2007 年) およびフェーズ II (2008 年~2012 年) を紹介し、競売制の割合および新たな部門導入に関する産業界との軋轢、また、炭素排出経費が生じる欧州連合 (E U) と生じない地域間の競争上の格差を具体的に説明した。

政界代表者による基調講演につづき、エネルギー効率性向上および排出権取引制度の在り方に関するセッションが始まった。学界代表がセッション導入の基調報告を行なったが、その後の質疑応答・討議には、全く予想外ながら日本の政治家も積極的に参加した。シュテファン・レヒテンバーマ (ヴツパタール気候・環境・エネルギー問題研究所、研究グループ「未来エネルギーとモビリティ・ストラクチャーズ」副代表) は、エネルギー効率向上にともなう大きな



可能性に言及した。レヒテンバーマによると、エネルギー効率の向上は省エネおよび技術促進にもつながり、競争上の優位をも意味する。日本及びドイツはこれらの可能性を他の産業諸国以上に容易に活用し得る状況にある。マルティン・イエニッケ (Prof. Dr., ドイツ環境諮問評議会顧問、ベルリン自由大学教授) は、E U が先駆的役割を担い、低炭素産業指向のイノベーションに投資して規制面で優勢に立つことで利益を得られると強調した。過去にドイツあるいは E U の基準・標準が他の国々でも採用された例が複数あったことを挙げ (例：再生可能エネルギー法)、イノベーションを誘導する企業が競争面で大きなメリットとなるとした。

排出権取引制度をとりあげた次のセッションでは、基調報告後の質疑応答・討議で相反する意見が表明された。フランク・シュヴァーベ (既出) は、排出権取引制度の実際の成果を紹介した。根津利三郎 (富士通総研専務取締役) は、日本が京都議定書の目標を達成するのが困難なのは、排出権取引制度の欠如が原因であるとし、日本およびグローバルな規模における排出権取引の必要性を強調するとともに、世界貿易機関 (W T O) で直ちに国際交渉を始めるべきと主張した。筆者は、グローバルな排出権取引制度を成功させるには、アジアの新興産業諸国を取り込むことが必要と考える。グローバルな排出権取引制度が中国、インドをはじめとする新興産業諸国に魅力的に映れば、すなわち、排出権取引で得られる利益を国の近代化に投資する可能性を前面に押し出すことができれば、それら諸国もグローバルな制度に同意すると考える。濱崎博 (富士通総研上級研究員、国際公共政策研究センター主任研究員) は、日本に排出権取引制度を適用・導入する際の多くのハードルを指摘した。会場の多数の産業界代表が濱崎の見解に同意するように見受けられたのに対し、日本の政治家の発言からは、排出権取引制度に対する前向きな意欲が感じ取られた。石油価格の高騰による圧力は、明らかに政治をも動かしたようである。持続可能な気候政策のために、この機運を利用することが肝要と考える。そのためにも、本会議でみられたような建設的な討議が、今後も続いていくことが望まれる。

日独ヤングリーダーズフォーラム
2008年で学んだ企業の社会的責任
浜川 綾美、シーメンス(株)

筆者は、日独ヤングリーダーズフォーラム (German-Japanese Young Leaders Forum) の2008年度サマースクールに参加し、様々なことを学んだ。この十日間の機会を得たことを心から感謝している。

グローバルな懸案事項のなかでも最も深刻かつ重要な案件のひとつである地球温暖化防止を本年度のテーマに据えたヤングリーダーズフォーラムでは、学術的、社会的、生理学的、また当然ながら政治的側面も含む様々な視点から同テーマに関する討論を通じて学ぶ、素晴らしい機会が提供された。基調講演者による精力的な発表、これにつづくフォーラム参加メンバーも交えての真剣かつ建設的な討議を通じて、地球温暖化問題に取り組む人々の強い責任感、情熱、決意が明らかになった。コペンハーゲンのオフショア風力発電所のシーメンス製風力タービンへの船旅で、筆者の所属企業がグローバルな問題の解決に貢献する様子を視察し得たことも、素晴らしい体験であった。この十日間で、一国の政府あるいは国際機関、非政府機関(NGO)、民間企業、個々の市民等による地球温暖化防止関連の活動および役割に関する理解を大幅に深めることが可能であった。筆者も地球温暖化の責任



をみずから負う必要性を認識し、本問題に関する知識をさらに深め、問題解決を目指す行動を起こすべく決意した。

サマースクールでは、地球温暖化に関する様々な知見を得ただけでなく、社会において経済が担う役割も認識することができた。実は、サマースクール開始時は、政府・行政関係者および研究者など他の参加者が地球温暖化に関して博学なのに対し、筆者の知識が浅薄なため、少々居心地が悪い思いを抱いていた。しかしながら、参加メンバーとの討議の場で、彼等には未知の民間企業の観点から意見を徐々に発表し始め、これこそ経済と社会の真の交流であることに気づいた。

社会には様々なステークホルダーがあり、主要な政策を形成する際には、各々が異なる役割を担う。個々の企業活動に

携わる者が、たとえ専門家でなくとも、政治的な枠組みや経済活動の多様な条件を理解し、改善に貢献する義務を持つと、今では確信している。すなわち、ひとりひとりの就業者が、日常業務を超えて広義の社会的責任を担う、企業市民 (corporate citizenship) たるべきということである。各就業者が各々の業務の社会的影響を認識し、理解し、それに従って行動する企業文化を企業市民の精神と呼ぶならば、筆者は今後、職務上の責任と社会的責任を結び付けて捉え、企業においても責任ある行動をとれるよう、企業市民として最善の努力をしたい。

ヤングリーダーズフォーラムでは、地球温暖化問題に関する理解を深めることができたことに加え、意欲的な参加メンバーとの示唆に富む対話や多彩な分野の基調講演を通じて、筆者自身の職務上の責任意識が向上したことが特に有意義であった。休憩時の短時間の会話を含まずすべての交流が実に刺激的かつ興味深く、この貴重な経験を生涯記憶に留めたい。素晴らしい参加メンバーおよび基調講演者、ならびに本ヤングリーダーズフォーラムの企画実施に当たったベルリン日独センターとロバート・ボッシュ財団の担当者、心から謝意を表したい。

(原文英語)



2008年6月21日のベルリン日独センター『一般公開の日』には多数のベルリン市民が訪れ、「日本語でお名前を書きます」コーナー（写真）を初めとする多彩なプログラムを楽しんだ。恒例の習字講座やワークショップ『マンガを描こう』も大いに賑わった。今年は、ベルリン日独センターがダーレム地区に拠点を移して十周年に当たるが、これを記念して建物の増改築を担当した建築家が行なった館内ガイドも、好評を博した。



ベルリン日独センターおよびドイツ学術交流会（DAAD）の共催による2回目の日独韓奨学生セミナーが2008年7月10日、11日の両日に開催された。写真は、『同人誌と日本のマンガ産業』について発表するラム氏（LAM Fan-Yi、ベルリン自由大学学生）。



2008年8月5日に第10回目のキッズ・レクチャーを開催した。ベルリンの私立カニジウスコレーク校の生徒および同校を訪問し交流事業を実施中の東京都立小山台高等学校の生徒らを、ベルリン日独センターに迎えた。



ベルリン日独センターは、2008年7月7日にベルリン芸術アカデミーで行なわれた『詩における過激性——日本の現代詩——伊藤比呂美』と題するポエジー対談の企画実施に協力した。ベルリン・ポエジー・フェスティバル2008年の一環となるもので、日本文学者のイルメラ日地谷キルシュネライト氏（Prof. Dr. Irmela HIJYA-KIRSCHNEREIT、ベルリン自由大学教授）が、国際的に著名な詩人・作家の伊藤比呂美氏と対談した。



ベルリン日独センターで開催されたワークショップ『日独の持続可能な開発のための社会科学・地理科学教育』（2008年8月19日～22日）におけるパネルディスカッション。

会議系事業(重点領域別)

国際社会における日独の共同責任

国際会議『メドゥーザを支配する——グローバル・ガバナンス——日本、米国、英国、ドイツのアプローチの比較』
協力機関:ベルリン自由大学、東京大学
開催予定日:2008年12月11日~12日

日独会議『開発協力における日独のグローバルな責任——異なるアプローチ、共通の利害関心』
協力機関:コンラート・アデナウア財団(ベルリンおよびボン)
開催予定日:2009年1月26日~27日

少子高齢化社会

日独ワークショップとシンポジウム『少子高齢化社会と家族のための総合政策』
協力機関:筑波大学、マックス・プランク学術振興協会所属外国社会法・国際社会法研究所(ミュンヘン)
開催予定日:2008年11月13日~15日
東京およびつくば開催

国家、企業、市民社会

日独シンポジウム『日本とドイツにおける市民社会——概念と実践』
協力機関:ハレ・ヴィッテンベルク大学
開催予定日:2008年10月9日~10日、ハレ開催

シンポジウム『労働の国際化——学問と経済の出会い』——ドイツ学術交流会プログラム『日本語学習と企業内研修』25周年記念
協力機関:ドイツ学術交流会(東京)
開催予定日:2008年10月16日、東京開催

日独ワークショップ『エコデザイン』
協力機関:国際デザインセンター(ベルリン)、国際デザインセンター(名古屋)、在日ドイツ商工会議所(東京)
開催予定日:2008年10月30日、東京開催

文化間の対話

アニメ上映と国際シンポジウム『アニメ グローバルかの時代におけるその文化的特性と普遍性』
協力機関:ライプツィヒ大学、横浜国立大学、国際交流基金(東京)
開催予定日:2008年10月30日~31日

日独会議『東アジアにおけるドイツのソフトパワー——過去および未来』
協力機関:大阪大学
開催予定日:2008年11月21日~22日、大阪開催

特別事業

『日独フォーラム第17回全体会議』
開催予定日:2008年11月25日~26日

日独人的交流事業

『日本人ジャーナリスト欧州招聘事業(ベルリン、ブリュッセル)』
協力機関:ロバート・ボッシュ財団(シユトウツガルト)
実施予定期間:2008年9月21日~28日

以下の交流事業は『<http://www.jdzb.de> --> 人的交流事業』で御覧下さい:

- ・若手研究者招聘プログラム
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム『日独青少年指導者セミナー』
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・日独高校生交流『たけのこプログラム』

文化事業

コンサート

第90回ダーレム・ムジークアーベント:
『クリスマスコンサート』
開催予定日:2008年12月19日

展覧会

ユリア・バイヤー写真展
『ヨーロッパの公共プールと日本の銭湯』
展示期間:2008年9月5日まで

『人生』日独キュルト展
オープニング:2008年9月19日、19時
展示期間:2008年10月24日まで

写真と解説による人物紹介展『佐野エンネ——草の根交流のパイオニア』
オープニング:2008年11月7日、19時
展示期間:2009年1月16日まで

その他

映画『Dinner with Murakami』
開催予定日:2008年12月4日、19時半

展覧会の観覧時間は
月曜日~木曜日10時~17時、金曜日
10時~15時30分です。

掲載の行事のタイトルが英語で挙げられているものは英語で開催、そのほかのものはドイツ語で開催(一部日独または日英の同時通訳付)します。
会場については、ほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。
詳しくは<http://www.jdzb.de> --> 各種行事



ベルリン日独センターは十年前に旧日本国大使館建物を引き払い(同建物は、今では再び日本国大使館建物として利用されている)、ベルリン南西の学術文化エリアであるダーレム地区に移転し、以降は同所で事業を展開している。前庭を市民の散策に開放し、本館の中庭では彫像を展示している。

ベルリン日独センター建物の増改築を請け負った建築家クラウス・ライヒャルト氏(Claus REICHARDT, R T W建築事務所)は、ベルリン日独センターの7月の所員遠足に帆船ローヤル・ルイーゼ号を提供、同船の歴史を説明した(写真左)。

ベルリン日独センターで勤務する日本人・ドイツ人あわせて27名の所員(写真下、2008年春撮影)は、会議系事業や様々なイベントの企画・実施に励んでいる。

